

『新天地』初出の「実学論」

丹尾安典

會津八一記念博物館の二階に、加藤諄先生の雄渾な墨書「實學論」の扁額が掲げられている。會津八一が「すでに図書館あり、講堂あり、更にこれに匹敵して劣らざる博物館を持つことによつて、学園の設備は始めて完成せられむ」と、大いに博物館設置の必要を説いた講演「実学論」にちなむ揮毫であった。

昭和二年十一月号の『早稲田学報』は、創立四十五年ならびに大隈総長記念講堂開館記念号であるが、そこに「記念大講演会」の記事が掲載されている。同講演会は大隈記念講堂を会場として、同年秋三日間にわたつておこなわれた。講演者と演題を日毎にあげれば如以下。

十月二十日

文化と文明と弁証法	教授文学博士	金子馬治
国民経済前途の観測	教授法学博士	田中穂積
現代政治界の重大問題	教授法学博士	浮田和民
実学論	高等学院教授	會津八一
記念大講堂の建築	教授工学博士	佐藤功一

十月二十一日

完成された過去の二大国民道と其調和

教授文学博士 五十嵐力

十月二十二日

電気と宇宙	教授工学博士	山本忠興
東洋文明の主格的地位	教授	松平康國
休業銀行問題の法律観	教授	寺尾元彦
社会教育の趨勢	教授	北澤新次郎
労働問題に対する一考察	教授法学博士	鹽澤昌貞

十月二十二日

経済現象の観照と景気循環の必然性

自由と愛	教授	服部文四郎
古代法と近代法	教授法学博士	遊佐慶夫
文芸の社会的基礎	高等学院教授	宮島新三郎
進歩の要素	教授法学博士	平沼淑郎

この記事を読むならば、會津八一の「実学論」は、昭和二年十月二十日に大隈講堂でおこなわれた講演である。しかし講演が以上の並び通りになされたわけではなかったようである。二十日最後の講演は佐藤功一の「記念大講堂の建築」となっているが、會津は「実学論」のなかで「先程佐藤博士のこの講堂の設計に関するご報告の中に」云々と語っているから、佐藤の講演のほうが先になされて

いたはずである。

上記『早稲田学報』によれば、講演会は入場無料で、午後六時からおこなわれ、「各講演者は一時間内外の講演をなし」、會津が「実学論」を語った初日（二十日）の閉会時間は十一時になっていた。

「実学論」講演は、ほとんど定本化している『會津八一全集』第十一卷（昭和五十七年十月、中央公論社）に載せられている。「編集後記」は宮川寅雄の執筆で、五三七頁に

「実学論」。早稲田大学講義録購読者のための雑誌「新天地」に発表されたもので、大隈講堂開設時の講演速記である。

と記されている。私は二〇一七年度の『早稲田大学會津八一記念博物館紀要』第十九号（二〇一八年三月）に載せた「會津八一講演「独学者為めに」——落穂ひろいの資料紹介——」のなかで、以上に拠って、『新天地』の何年何月号に「実学論」が掲載されているかについての言及がない、などと書いてしまったが、これは間違いで、さらにさきの五四〇頁に

実学論 昭和三年一月号「新天地」

と初出情報は記されている。

ちなみに昭和三十四年三月に発行された『會津八一全集』第七卷所収の「実学論」は、本文テキストの冒頭に初出誌をあげ、「『新天地』昭和三年一月号」とし、宮川寅雄の「編輯後記」には、以下のような記述がなされている。

「実学論」は、早稲田大学講義録購読者のための雑誌「新天地」に発表せられたもので、大隈講堂開設時の講演速記である。「新天地」は新潟の川村佐武郎氏の提供本を定本とした」

と。この記述は昭和四十四年四月発行の『會津八一全集』第七卷所収の「実学論」でも変わらない。

かようなことをくどくど確認したのは、「新天地」は新潟の川村佐武郎氏の提供本を定本とした」という記述に、いささか注意をはらってもらいたいから

だ。この記述は、「実学論」の掲載された『新天地』が、そう簡単に閲覧できる雑誌ではなかったことを、おのずと示しているといつてよい。

げんに早稲田大学図書館には、同誌当号原本はない。

『新天地』を提供してくれた川村佐武郎は、明治三十七年栃木県の生まれで、昭和四年に早稲田大学文学部東洋哲学科卒。昭和二年から昭和四年三月の卒業まで、下落合一二九六番地の秋艸堂に通い、會津八一から書の指導を受けた。これについては、安藤更生が『書豪會津八一』（一九六五年十月、二玄社）のなかで

「昭和二年ごろ、道人は乞はれて山口隆一、木内直子、川村左武郎^{（つむぎ）}らのために、習字の稽古をつけたことがある」

と言及している。稽古の詳細は、渡辺秀英・川村佐武郎共著『會津八一 書の指導』（一九八一年八月、考古堂書店）に語られている。そして当書には、十月二十日の夜に大隈侯記念講堂の開館記念として講演会があり、講師の一人として會津八一が「実学論」について話したことも触れられている。

翌昭和三年一月二十六日、會津は父親の病氣見舞いのため新潟へ帰郷し、二月三日早朝上野駅にもどった。帰宅すると留守中に坪内逍遙から絵葉書が届いていた。會津の逍遙宛返信を筆写していた川村佐武郎は、『會津八一 書の指導』に当日二月三日の文面

「『新天地』御過褒恐れ入り候。小生一寸病人見舞のため、過日来帰郷。」

云々を引いている。この逍遙宛葉書末尾に秋艸道人が自慢げに書いた

「記念講演の際のべつ拍手喝采といふのは、小生ばかりなりしとか申候」

というような文章を読むと、「実学論」講演が好評であったこともわかってくる（逍遙宛書簡は、昭和五十八年一月刊行の『會津八一全集』第九卷より）。

川村はまたさらにこう記している。

「冒頭の『新天地』とは、昭和二年十月二十日早稲田大学大隈記念講堂の開

館式に記念講演が催された。その時講師の一人として會津先生が「実学論」と題する講演をされ、その速記を掲載した雑誌が『新天地』なのである。早

稲田大学出版部から出され、当時刊行されていた早稲田大学講義録の連絡紙として毎月刊行されていた」
云々。

この『新天地』を私も一昨年偶然に入手した。「実学論」は早稲田大学會津八一記念博物館設置にかかわる重要なテキストであり、その原誌確認も難しい状況にあるので、ここに原誌印刷のまま掲げておく。

表紙は、左端下に「ひすゐ」とあることから、杉浦非水のデザインとわかる。またその下部に「第二巻 第一号」と書かれているが、前年すなわち昭和二年四月の「第一巻第一号」が『新天地』の創刊号というわけではない。「美童如是我聞録」(『一寸』第四十九号、二〇二二年二月)に書いたとおり、明治四十四年四月刊行と思われるものが初号であろう。これは私の架蔵本であったが、現在は早稲田大学図書館の所蔵となっている。

『新天地』掲載の「実学論」(Aとしておく)と全集版(昭和三十四年の全集第七巻・昭和四十四年の全集第七巻・昭和五十七年の全集第十一巻)の「実学論」(Bとしておく)のテキストには異同がある。Aはほとんど総ルビであるが、これはBに反映されていない。またBには、Aにない改行部がかなり追加されている。A「一一」頁上段にある「美術の為に」「生活のために」は、Bでは「美術の為に」「生活のために」となっていたり、A「一二」頁上段にある「私は三年ほど前から一番の鳩を」や「愈々この雛が」の部分が、Bでは「私は三年程前から、一番の鳩を」、「いよくこの雛が」と変えられていたりする。そのほか原文の誤植を訂正して全集版テキストとしたところもある。A「一七」頁上段「独乙のルコツ、クグリュンヴェーデル」は、Albert von Le CoqとAlbert Grünwedelをさすのであろうから、Bでは「独乙のルコック、グリュンヴェーデル」と訂正されている。

私事ながら退職する直前に、これを当館紀要に掲載することができたのは、ま

ことに僥倖であったと感じている。





◆新天地 一月號目次

- ◆早春(三色版)……………齋藤五百枝畫
 - ◆東都雜觀——ウインター・スポーツ(寫眞版)
 - ◆春還れり……………吉田絃二郎
 - ◆實學論……………會津八一
 - ◆植物の迎春……………帝國大學教授
理學博士 草野俊助
 - ◆俳諧の新年……………村岡比佐志
 - ◆世界のうごき……………中村佐武郎
- ▲同攻文壇▼
- ◆受験感想、小問小答……………
 - ◆散文——短歌——俳句……………
 - ◆新體詩、歴史こよみ……………
 - ◆友の音づれ……………

實學論

會津八一

10



私が平素美術のことにいくらか趣味を持つて居りま
 する爲に、實學論といふこの演題は何かの間違ひではな
 いかといふ御注意を、さきほどから屢々承はるのであ
 りますが、これは敢て間違ひではありません。この實學
 といふ言葉には昔からいろ／＼むづかしい解釋もあるや
 うであります、つまり世の中の爲めになるやうな學問
 といふのが一つ、今一つは自分の身になるやうにする學
 問、この二つの解釋に歸するやうであります。そこで、
 美術などを好むものは世の中の爲めになるやうな學問を
 論ずる資格は無からうといふ諸君の御考へであるなら
 ば、私としては甚だ不満の至りてあります。先程佐藤博
 士のこの講堂の設計に關する御報告の中に、この設計を
 するに當つて少しも外部からの裝飾を加へなかつた、こ
 の壇上に人が立つて話す其言葉が如何に能く聴衆に聞え
 るかといふことの外には何も考へなかつたといふ御話で

ありましたが、是は極めて重要なことで、すべて美術は
 かくの如き所に根柢を持たねばならぬといふ點に於て、
 私は佐藤博士の御設計のこの態度に向つて誠に敬意を
 表するものであります。先年大なる地震がこの關東を見
 舞ひましたる時に——私は郊外に住んで居りますが——
 私の附近に多くの繪師が住んで居られます、この吾々の
 村の被害は幸に微々たるものであつたけれども、さて
 明日からの生活について繪師達は非常にあたまを悩ま
 せまして、私までが其人々の會合へ呼び出されて御相
 談を受けました。この東京の大都會、最も多く美術を要求
 する所のこの大都會が地震に遇つた、火事に遇つた、全
 滅である、當分美術は要らなくなつてしまつた、しかし
 ながら我々はやはり明日からも生活を續けなければなら
 ぬ、それを如何したものであるかといふのが勿論其時の
 問題であつた。その席上では、普佛戰爭當時の巴里の美

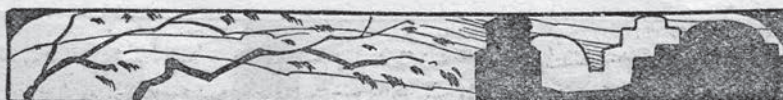


術家の例を引いて、吾々は飽くまで超然として美術の爲に繪を描いて居なければならぬと主張する人もありました。或る人はまた、我々は暫く繪筆を捨て、生活のために筋骨労働者にならなければならぬと叫びました。最後に私の申しましたには、誠に申しにくい事であるけれども、諸君は明日からペンキ屋になつて、ペンキの桶提げて市に出て、この復興せんとする東京の數知れぬバラックにペンキを塗つて貰ひたい、かやうに私は申しました。勿論この一言は非常なショックを一座の人々に與へました。そして私自身今も折々この時のこの言葉を想ひ出して餘りに辛辣ではなかつたかと危ぶむのであります。がそれは言葉のことで、意見としては私は今に於ても聊かも改めようとは思ひません。何となれば若し美術といふものが、火車や地震に遇つてすぐに要らないものとなるやうならば、始めから人生には要らないものであつたのだ。如何に貧乏しても、如何なる逆境に陥つても、人の心の根本に於て深く根ざせるものがあつて、人間として又はその人自身として、止むに止む能はずしてそれが外に發して美術となる、そしてそれで始めて眞の

新 天 地

美術である、このやうに私は今も尚ほ考へて居るからであります。然るに世間には美術と骨董とを混同する人、美術を贅澤の沙汰と心得る人、いろ／＼心得ちがひの人があります。もし美術が贅澤物であるならば、文學も、哲學も、贅澤物とならぬとも限らぬのであります。又佛蘭西製の繪具で描けば美術であり、ペンキで描けば工藝、唐墨でかけば美術で開明墨汁でなら工藝、掛物はみな美術でポスターはみな工藝、こんな風に心得ちがへて居る人がある、しかもそれが往々専門家自身にもあるのであります。しかし凡そ美術の發生には今少しく必然的の要求があり、其價値は更に根本的な所にある。であるから先程も私はこの講堂の設計に外面的裝飾は一つも加へなかつたといはれた佐藤君の一言に向つて取り敢へず敬意を表したのであります。かやうに美術といふものに向つて私の態度を定めておきます以上は、此所に私が罷り出て、この實學即ち世の爲めになる學問について多少の議論を試みるべき資格が無いことも無からうと自ら信ずるものであります。が本夕此所で私の主として申し上げたいのは、二番目に申しました所

一一



の、自分の身になるやうに學問をするといふこの事であり
ます。便宜上美術上の例證を引くことにするかもしれ
ませぬが、つまりあまねく専門がいろいろ違ひまし
ても、如何にせば學問がほんたうに吾々の身に附くやうに
なるかといふことに就いて、聊か平素考へて居ることを
申上げること致します。昔から鳩に三枝の禮ありと申
します。鳩といふ鳥は天性禮儀を心得て居る、親が上の枝
にとまると見鳩は一つ措いて下の枝にとまる、かやうに
私共は子共の時に教へられました。これは或る古い書
物に書いてあるのであります。私は三年ほど前から一
番の鳩を自分で飼つてみて居ります。若しも果してこの
鳩に三枝の禮などがあるならば、自分もいさ少し禮儀作
法を習はなければならぬとも考へまして、毎日眺めて居
るうちにやがて其鳩に雛が出来ました。親鳩は凡そ鳩ほ
ど子共を可愛がるものは無からうと思はる、ばかりに致
して居りますうちに、愈々この雛が成長して一人て餌を
拾ふことが出来るやうになりますと、これは又意外なこ
とに、凡そ鳩ほど子供を苛める鳥はあるまいと思はる、
程な態度になり、子鳩の方でもまた一向に禮儀などを辨

へて居る風を見せません。しかし試みにその籠の中へ留
り木を二三本架けておきますと、夕方になれば、なるほど
親は上へとまり、子は下へとまります。これを古人が三
枝の禮と見たのでせうが、またよく考へて見ると、
鳥は凡べてこの地上に敵を持つて居る、犬、猫、蛇、か
うしたもののが彼等の大敵であるから、地上から一番遠い
所が一等席である。其所へ一族中の最も勢力の強大な親
鳩が止まる、小鳩もそこへ行きたいには行きたいが、一歩
譲つて下に居る。かう考へて見れば聊か殺伐な禮儀であ
る。とはいふもの、私共人間の持つ禮儀といふものも、
本來は矢張りさうした痛切な味があつてこそ意義が深い
のではあるまいか。利休が茶の湯を致しまする時に、豊
公幕下の猛者達がしきりに窺つて見るけれども、殆んど
武藝といふ所の隙といふものを彼の姿態に於て見出さな
かつたといふやうな話を聞いたことがあります、左様
な強い張りきつた引き締つた味があつて、始めて茶の湯
などにも深い意味があるのではなからうかと、私はまた
思ひ直しても見るのであります。今日でも御目出度い時
に砲兵や軍艦では大砲を放つ。人を殺し船を沈めるとこ



ろの大砲を、しかもどんぐり、打つ放してそしてそれが最高の禮儀である。又歩兵は鐵砲に劍を着けてそれを目よりも高く差上げることが最敬禮になつて居る。また支那では、君子佩玉といつて璧といふ儼狀の飾りを禮裝につける風があつた。また佛像の腰にこの璧が刻んであるのも見られる。よく調べてみると、この温厚なる男子や柔和なる佛像の佩びて居らるゝこの璧といふものは、昔石器時代に棒の先につけた武器に多少の變化と修飾が加へられたものに外ならぬ。そこで君子の佩玉にもまた鳩の禮儀の如き或るものを認め得る、これを禮といふも可、禮にあらざるといふも可、たゞ其眞意義は其事實の中にあることを忘れてはならぬのであります。なほ鳥のことして中せば、私は近頃鳩のほかには薔薔鸚哥といふものを飼つて居ます。英語ではグレイ・ヘッデッド・バード、即ち白髪にして戀ひする鳥、甚だ皮肉な名であります。さて此鳥をなぜラブバードと呼ぶかと申しますに、非常に夫婦の愛情が濃やかな鳥で、尤も大抵の鳥は愛情の濃やかなものであるが、アフリカから始めて歐羅巴に輸入されて來ました時に間もなく其雄の方が死んだ。すると

新 天 地

雌は大層鬱ぎ込んで居たが、その翌朝亡天の後を追つても死んでしまつた。そこでラブバードであります。ところが果してそれ位に愛情の濃やかな鳥であるかと段々と落着いた人が觀察せられましたところが、左様では無い。鳥は風土の異なる國へ移されると食べ物よりも、其變化のために打撃を蒙るもので、夫が堪へられなくて死ぬ頃には妻も九分通りの重態であつた、それでも世間では今以てラブバードで通つて居るのであります。それで思ひ出しますのは推古天皇の三十二年、二月の二十日と二十一日、この二日に互りまして聖德太子と其妃膳部大郎女が薨くなられた。此歴史上の出來事に向つて昔からいろ／＼の解釋があります。二十日に妃がなくなつて、其翌日が聖德太子であつた、其前には太子御生母のおかくれがあり、引きつゞいて御二方の御病氣であつたのですが、此時に至つて急に相次いで薨くなられた。これを見て熱烈なる愛の結果であるところの精神的の御最期であるとかう云ふやうに穿つた觀察をする人もだん／＼あるのであります。けれども其當時は疫病が非常に流行して居た、新に外國と交通すればいつも新しい流行病があ

一三



る、殊にあの時の蘇我物部兩氏の争もこの疫病を本として花が咲いた。そこで菊賞鸚哥などの例に依つては甚だ恐れ多いことではありますけれども、この疫病のために御二方とも御かくれになつたと考へても少しも無理は無いのであります。そこでこの聖徳太子の御肖像は、小學校の教科書などにも出て居まして殆ど誰知らぬものなき有名なものがありまして、これは朝鮮から來られた阿佐太子が畫かれたものと申し傳へて居るもので、恐らく全國の小學校の先生は全國の小學生に向つて、聖徳太子の御顔は此様であつたと説明して居らるゝのでせう。恐らくは諸君も左様に信じて御いてなさること、存じます。しかしながら昨年支那から二十枚ばかりの拓本が送られて來ました。それは北京の或る商人から東京のある美術研究團體に寄贈して來たもので、それを見ますと、支那の古い都、洛陽の西の方から發掘した唐時代の墓の、いはゞ穴倉のやうな石室の側壁の彫刻を摺つたものであります。その彫刻には植物もあり鳥もあつたが、人物も澤山居た、その人物の中にあの御物の御肖像に拜見する聖徳太子の御顔、即ちあのおもながの、頬骨の立

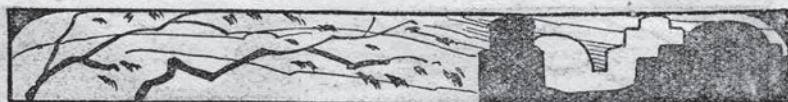
つた、下顎の尖つた、そして一種特別の表情を持つて居られるあの御顔に頗る似た人が幾人も現はれて來た。私はひそかに胸を轟かして感に堪へながらこれを眺めて居りますと、後から私の肩を叩いて、此類似を論じ出した一人の老美術學者もあつたのであります。詳しくいへば、あの御肖像の畫風は決して阿佐太子の作即ち聖徳太子御在世の頃のものではなく、唐時代の香ひがあるものであるといふことは、すでに久しく學者のいひ古して居る所であります。兎に角是が太子の御姿であると我々の信じ切つて居たものでも、洛陽の方面からさういふ顔をしたものが發掘せられるといふことになる、餘程考へ直してみなければならぬ。それにつけてもあの御肖像について、これまで自分だけの主觀的感想をいろ／＼立ち入つて申述べた多く人々は、誠に早まつたことであつたと申さなければなりません。それで先程の二つの鳥のこと、引き續いて聖徳太子の御肖像のこと、我々は物に接し、物を見、これを知り、これを信じますには、餘程用意してかゝらなければならぬ。文獻があり傳説があつても、これを信じて疑はざらんとするには、慎重な



用意が要る。そして我々を最も有効に用意せしめるものは一にも二にも實物である。千の文獻よりも一つの實物である。實物の持つ所の權威、何物もこれを遮ることが出来ぬのであります。

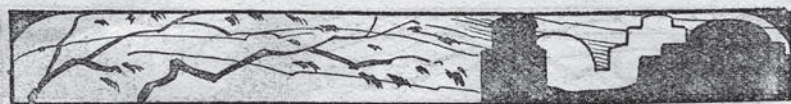
私は、早稻田大學の御懇望で、只今は東洋美術史について貧弱ながら講義を致してをりますが、一體この東洋美術史など、いふものは、誠に厄介な學科であります。といふのは、昔から東洋ことに支那の美術のことを書いた書物は澤山ありますが、それが大凡三種類に分れる。第一は美術製作の原理を書いた所謂畫論の類、第二は所謂名畫記の類で、畫家や其作品の評判記、第三は伽藍記の類で、建築に關する記録であります。ところがその畫論、名畫記、伽藍記に記されて居る美術品は殆ど全く今日に存するものがない、その實物の存在しない、いはば空虚なる記録を、殆ど暗誦的に記憶して居る人が、これまでの美術史家である。だから厄介な學科だと申すのであります。私共が美術なり何なり、研究したり鑑賞したりしようとする時に、無くなつたもの、名を暗記して居るだけでは、殆ど全く意義の無い仕事であります。それ

だから、これをして意義あらしむべく、實物尊重の精神が只今ではだいたい覺醒してまゐりました。例へば支那に佛敎が這入つて來たのは、後漢の明帝の時、西洋紀元の六十四年と普通に申して居りますが、其後支那で佛敎が興隆した結果、誰が何の爲めにかういふ佛像を造つた、何處の何寺で斯ういふ佛畫を畫いたといふ文獻は、歴史の上に實に枚擧に遑ないほどで、丈六即ち一丈六尺、又はそれ以上の佛像が造られたことも澤山に記録されて居ります。然るに今日實際、吾々の目に觸れるやうに遺つて居るものといへば、西洋紀元四百二十年頃のものが先づ一番古い所で、佛敎渡來後四百年ばかりの間のものは、今は唯だ記録のみを遺して失はれて仕舞つた形であります。そして此西曆四百二十年頃のものとして、僅に高さ一寸か二寸位の小品で、之を以て當時旺盛なりし支那人の藝術的生活を、充分に窺ふわけには行かない。それこそ本氣に打つかつて行つて、充分に鑑賞するに足るものは、西曆四百六十年頃から造り始められた彼の有名な大同の石佛、つゞいて五百年から着手せられた龍門の石佛、及びそれに前後する天龍山の石佛、これ



等のものは日本人のみならず世界の認めて偉大なる美術となすものであつて、苟くも東洋上代の藝術活動を論ずる時に、何人も言及せぬ者はなく、歐羅巴で出版せらるる此種のあらゆる畫譜圖録の類には、特に此等の遺品の爲めに最も多くの圖版を割當てないのは無いのであります。所が此等の大藝術品は最初如何にして吾々に傳へられたかといへば、大同石佛の最初の紹介者は、現に我が早稻田大學の講師なる伊東忠太博士で、時はたしか明治三十二年頃、實地に調査されたその時からであります。天龍山の石佛は、たしか大正七年に關野貞博士が自ら踏査されて、それから忽ち世界に現はれ出たのであります。また龍門といふ所は、先程申した洛陽に程遠くないといふ關係から、昔から多く知られて居たには居たけれども、昔は佛像の下に刻んである所の銘文の文字を味ふといふ意味で知られて居たが、造形美術として幅を利かすやうになつたのは、最近の現象といつて宜しい。ところが此天龍山や大同に關しては、とかく文献が乏しい、多少あつても世間にはあまり知られなかつたのを、伊東關野の方々が、自から實際に調査して忽ち世界の

なる存在とせられたのであります。さらに又この大同だけに就いて申せば、此の石佛群は、支那北魏の拓跋氏といふ民族の、特殊の趣味性質によつて作り出された藝術であるといふ意見が、一部の美術研究家の間に行はれて居りました。之は大村西崖君などの専ら唱へられた説であります。尤もこの石佛群は魏の民族の特殊な理想から出来て居るといふことを、唐時代の或る坊さんが書いたものがある。それを楯に取つて大村君が主張せられたのです。ところが其次に、それに反對して、松本文三郎博士は、これは印度の笏多時代の藝術の影響を受けたもので、拓跋氏の独自の藝術ではないと唱へられた。此議論を組立てる爲めに、松本博士は兎に角一寸大同に行つて御研究になつた。然るに其後になつて、木下空太郎博士は、大同に留ること一ヶ月、その不便な山寺に起臥して、夜は卓上の支那蠟燭の光で、いろいろ研究せられた。其結果、拓跋氏だけの藝術ではなく、また笏多の影響だけのものでもなく、北方印度の影響もある、波斯西域の影響もある、それが支那固有の傳統に合して、渾然として此の大同の藝術となしたといふやうな意味の報告



をされたのであります。私は自分で大同を調べたわけでありませぬが、精細なる報告を見て、誠にそれに相違ないと思ふのは、第一には木下氏の態度に信頼し、第二には佛蘭西のベリオや、獨乙のルコツ、クグリニンヴェールなどの、前後數回にわたる中央亞細亞に於ける研究旅行の收穫がこれを證明するからであります。して又さういふ場合に於て、この大村、松本、木下三君の御説を比較して、誰の頭腦が一番優れて居るかといふことを此所て決定するわけには行かぬ。要するに、實地に查べないで遠き昔の文獻を信じた人は、其研究方法に災せられて其結論が完全しなかつたし、又同じく實地に踏査するにしても、比較的精細に觀察する暇を持たれた人が、比較的行き届いた結論に到達せられたといふまでのごとであります。であるから、苟くも事實に徴して、熱心に、忠實に、しかも虚心に、觀察を怠らなかつたならば、着實正確なる知識が我々のものとなることを忘れてはなりません。

東洋美術史の畑では、明器といふものが最近に非常に重要な位置を占めることになりました。これは支那で昔殉死の代りに用ゐられた人形で、上野の博物館などにかなり澤山あるし、私も少し持つて居るが、皆な土製である。ところが近頃支那で出來た『辭源』といふ字引を御引きになると、木で造つたと書いてある。此邊が面白いところですよ。昔造られた時には、木のものも、土のものもあつた。寧ろ上等品は木で造つたかとおもはれるのであるが、千年二千年と経つうちに、木のは腐つて、土のだけが今日に残つたので、『文選』のなかに、或る人が古い墓を掘つた所が、其中から木の人形が澤山出て來た、それがもうすつかり腐つて脆くなつて居て、一寸突ツつて見たらすぐ滅茶々に崩れてしまつたといふことが書いてある。『文選』は大層古い書物であるのに其頃にもうこんな調子である。此の明器といふものは、上は三代から漢を経て六朝から唐に至つて發達の限りを盡した。そこで今日實物から東洋美術史、ことに彫刻の歴史を研究する者は、この明器と佛像とを除いて外には殆ど材料を有たぬといつてもいい、位に大切にして居るのであります。ところが文獻が無い、無いのでは無いが、たんとは無い。唐の頃になつて、木で造つた人形に、ほんたうの着物を着



せ、ある場合には本當の人間の毛髪を植ゑたりしたのももあつたといふことが、書物に見えますが、今日までそれが腐らずに残つて居ても、今日の目から美しいものであるか否かは別問題として、かくそれ等は皆な無くなつて仕舞つた。又ある書物には、六朝時代のある身分のある人が臨終に、私を葬る時には土製の明器が五つ六つあればそれで澤山だから、それ以上の事をすると云ひ遺して死んだといふ逸話が、其人の儉約を稱する意味で記されて居ますが儉約で褒められる位だから明器として善盡し美盡したものはいへない。これは六朝の話であるが、なるほど唐などになつて、土製でも随分精巧なものも出来たが、ずつと近代に至るまで、もつと詳しくいへば、清朝の終り頃に、支那の羅振玉君が北京の道具屋の店て偶然目つけて學界に紹介するまでは、支那の美術品として取扱つた人は一人もなかつたのであります。そこで古人がこれを美術と認めなかつたとしても、物そのものの實際に有する價值によつて、吾々の時代の新らしき目によつて、優れた美術として取扱はれるといふところに、甚だ深き意義があるのであります。同じくまた東

洋美術史の範圍で今一つ例を申すならば、これも小學校の教科書にも出て居るので恐らく御承知のない方はあるまいと思はれるほど有名な、世界に於ても有名な、奈良の法隆寺の壁畫は、奈良朝の初期に、唐を経て来たところの印度の影響で出来たものでありますが、支那でも唐から五代にかけて、今日の四川省の成都には、夥しい壁畫があつた、成都の大聖慈寺といふ大きな御寺には、その中に三十八の小院があり、その三十八院の所々方々に、八千五百餘面の壁畫があつた。今日の法隆寺の壁畫と申しますのは、金堂といふ堂の中に、柱と柱との間が十二あつて、それが十二面の壁畫になつて居る。其の中で如來が四體、菩薩が十數體畫かれてある。ところが成都の大聖慈寺の壁畫には、如來が千二百體、菩薩が一萬四千餘、其外にまだいろいろなものがあつたことが、記録にあるのであります。そこで我が國に現に古き壁畫が實在してこそ、成都の記録にも意義があり生命がでて來るのであるが、若し我が國に一枚の壁畫も遺らなかつたならば、この記録も興味なく生彩なき空文となつて仕舞ふ。遠き未來に於て何時の日か、我等の美しき法隆寺の壁畫



が、悲しくも長へに消え失せて仕舞ふならば、今日尙ほ吾々の想像に燦として輝ける成都の壁畫の記録は、唯だ誇大なる数字となつて葬り去られるのでせう。この實物によつて初めて文獻に價値があるといふことは、吾々に對して意義甚だ深いことであります。

斯ういふ工合にだん／＼考へて來ますと、もはや美術史だけのことはなくなる。何事を研究してこれを體得するにも、吾々は此所で大悟一番、實物に目醒めなければならぬ。いやしくも事實に立脚せざる即興的主觀論や、實物を知らずして唯だ參考書類の請け賣や孫引や折衷てやつて行く氣拔けのしたやうな學問、すべて左様な學風が遠く影を潛めねばならぬ時代は既に久しく到來して居る。私は昔この早稻田大學に學んだものでその頃から學の獨立といふことを聞かされて居るが、學の獨立とは、外國語から獨立して、自國語を以て研究するのだと屢々教へられた。又或る時には、官學に對して實力を以て拮抗するのが學の獨立であると教へられた。しかしながら、私はこの最も記念すべき今夕、この廣壯なる講堂の壇上に立つて、吾々がこの文獻若くば傳説、さう

いふものから獨立して行くことが、今後吾々として是非とも採らなければならぬ所の態度であり、それでこそ、今の世に要求せらるゝ所の眞の學問の獨立であるてはなからうかといふことを、滿場の諸君に問はんとするものであります。

私共の最も敬愛に堪へざる坪内逍遙先生を記念すべき事業として、先生が平素最も興味を持たれまして、殆ど一生を其研究と革新とに送られたところの演劇に縁める博物館、これを我が大學内に建設することになつて、着着仕事が進んで居ります。これは御同様何よりも喜ばしき事でありませう。此のふさはしき好記念物を以て、吾々のこの敬愛すべき先生を、後世この學園の衆徒をして想慕せしむるの料とするといふことは、思ふだに心地よき限りであります。しかしながら、たゞこれを以て後世想慕の料とするといふだけならば、私は甚だ飽き足らぬ。即ち將來我が大學の學徒をして、演劇に關する幾多の書物で得たる知識よりも、教場で聞いた講義よりも、こゝに陳列せらるべき幾多の實物の刺戟によつて、最も強く最も確かなる教訓を受けしめるといふこと、即ちそこに



大なる積極的の希望が無ければ、私は甚だ飽き足らぬもの
 てあります。恐らくはこれが、此事業の眞の創案者たる
 我が老博士の深き思召の存するところではなかつたでせ
 うか。それと同様に、私は又あらゆる博物館がほしい。
 先刻も總長の御話で、今更の如く意識を新にしたのであ
 るが、我々の學園は東洋に於て最も豊富なる圖書館を持
 つ。今又此の如き立派なる講堂を持つに至つた。圖書館
 は文獻の貯蓄所であり研究所である。その研究の結果を
 發表するためにこの講堂がある。すでに圖書館あり講堂
 あり、更にこれに匹敵して劣らざる博物館を持つことに
 よつて、學園の設備は始めて完成せられむとして居るの
 てあります。さて、かやうなる簡明なる道理は、經營の
 任に當らる、先輩諸公の、勿論百も二百も御承知の筈で
 ありますが、思うて尙ほ且つ及ばざる所に諸公の御苦心
 も拜察するのであります。本夕この講堂の諸君の中
 て、平素から我が學園の爲に深厚なる同情を以て、學園
 をして今日あることを得しめられた大方の諸君は、かや
 うな態度が學徒として必要であり、左様な設備が學問の
 討究に眞に必要であるといふことを深く御諒解下さいま

二〇
 して、將來は、その意味を以て御援助あらむことをこゝ
 に私は懇望してやまざるものであります。又學生諸君は
 、よし暫く我が學園に博物館がなくとも、よくこの實學
 の本旨を體得して、眞剣に御勉強あらむことを望みま
 す。これにて御免を蒙ります。

感冒の豫防

- 一、感冒にかゝらぬ豫防は、夏から、海水浴、日光浴、冷水マサツ等において身體を鍛へる事。
- 二、皮膚を強くする事、即ち冷水で洗顔し、戸外運動を充分にとり、腹巻は冷いまゝ、素肌にとりかえること。
- 三、戸障子の建つけと、熾房の設備に注意すること、開け放しの室に假寝をせぬ事、寒中腹巻のまゝ、外出せぬ事。
- 四、入浴後直に寒風にふれぬ事、寒中路上に停立禁止せぬこと、戸外からあたゝかい室に入ったならば、必ず上着を脱ぎ、又濡れた衣服は着替ること。
- 五、感冒流行時は、人混の中へ入らぬこと、咳嗽やくしやみのしぶきをかけないやう、又他人のそれを避けること、外出から帰宅したならば必ず含嗽をすること。
- 六、健康人は避寒よりも抗寒してゆくこと。